
猫を被ったネコ

ナカムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫を被ったネコ

【Nコード】

N9836P

【作者名】

ナカムー

【あらすじ】

子供の頃の想い出。そして約束。思いがけず再開した2人は……。

『いい？ 祐と私はずっと——なんだから、いつまでたっても忘れちゃ……だめなんだからね！！ だから約束、もう一度逢えたら——！！』

カーテンの隙間から日の光がさしている。

……ずいぶんと懐かしい夢を見た。

あれは、もう10年ぐらいになるのだろうか。小さい時によく遊んだ女の子。突然、引越すと告げられ、何かを約束をした女の子。

……もう、名前もよく思い出せない。ただ、活発な女の子だったように思える。

制服に着替え、玄関出る。

見上げた空は、清々しく、何かが起きそうな蒼く澄み切った空だ

った。

教室に入ると、何だかみんなが騒がしい。特に男子が。

『金髪の美少女転校生キターー!!』

……だそうだ。テンション無駄に高いな。いや、まあ気にならな
いわけじゃないんだが、って俺は誰に言い訳をしているんだろう。

HRの時間になった。噂の転校生は、どうやらうちのクラスらしい。
い。

「おい、おまえら席に着けー！ みんな知ってるかもしれんが、
このクラスに転校生がやってくる。昔、この街に住んでいた時期も
あるみたいだが、おそらくおまえらには何の関係もないから安心し
ろ。坂の上にある洋館に住んでいる所謂お嬢様だ。住んでいる世界
が違うと言ってもいい。こういうのは好きじゃないんだが、くれぐ
れも粗相のないように、との上からのお達しだ。サントメール、入
れ」

がらがら、と教室に入ってきたのは長い金髪を一部ツインテール
にした、—————ようするに美少女だった。

「ただいまご紹介にあずかりました、瑠璃・サントメールと申しま

す。これからよろしくお願いいたします」

男子共の歓声に教室がつつまれる中、何故かはわからないが、俺はこのありふれた自己紹介にどこか違和感があった。

結論をいえば、この転校生が猫を被っていたという事なのだが、何故それが発覚したかといえば、原因の1つには、彼女の被った猫がお淑やか過ぎたことにあるだろう。

登校初日から、文武両道、品行方正、眉目秀麗。つまりは完璧超人の名を欲しいままにしていたわけで、1週間もあれば学園の人気者。下駄箱にラブレターが溢れるほど入っているわ、つき合ってくれ、なんて告白も後を絶たない。全部断っているみたいだが。

これはまだましな方で、たまにお金持ちというところに反応して来る奴等がいる。といっても、何かしらの巨大な力が働いて消滅するのだが、これは別の話。

力があれば人が集まり、人が集まれば派閥ができる。つまりは排除派と擁護派だ。擁護派といっても、甘い汁を吸おうなんて下心が見え隠れしている時点で碌なもんじゃない。

普通はここまでひどくはならないと思うのだが、相手がなにをやってもニコニコと微笑んでいるものだから、だんだんと遠慮がなくな

なってきたのだ。

そしてついにキレた。完全にキレた。もう見事なまでのぶちギレようだった。まあ、よく1ヶ月ももったと思う。

「……………さい」

「え? どうしたのサントメールさん」

「うるさい」

「サントメール……………さん?」

「うるさいうるさいうるさい! もう放っておいて! 関わらないで!! 近寄らないで!!!!」

「何を言って…………」

「もう、うんざりなの! 結局、みんな私の家柄しか見ない、お金しか見ない。だからもう帰って!」

放課後の教室での出来事だった。

この場面に居合わせることができたのは、途中で教室に忘れ物をしたことを思い出したからで、教室から出てきた女子たちにすごい顔で睨まれた。

何が俺を突き動かしたのだろうか。普通ならその場でUターン。少なくともすぐに教室に入ったりなどしないはずだ。

ところが俺は、込み上げてくる熱をそのままに教室へと入って行った。

「……………なに？」

「くっ、くくく。はははははは！」

「なによ！」

「そう！ それだ！ この1ヶ月、ずっと違和感があったんだ。何でかはわからない。俺の中にあるお前のイメージがどうしても繋がらなかったんだ。でも今、やっと繋がった。お前、そっちの方が似合ってるよ」

「…………ふん。お前、名前は？」

「佐藤祐一だよ。お嬢様？」

「祐一？」

「サントメールさん？」

「なんでもない。あと、瑠璃でいい。私も祐一って呼ぶから」

「わかったよ、瑠璃」

「祐一。明日から覚悟しておくように。私のことあれだけ笑ってお

いてただで済むはずがないんだから」

この、何でもないようなやり取りに、俺は何故か懐かしさを憶えていた。

「おはよう、祐一」

「あー、おはよう瑠璃」

昨日は変に気分が高揚してたし、朝は寝惚けていたんだろう。そうでなければ、一夜で雰囲気の変わった完璧超人と、今まで全く関わっていなかったクラスメイトAがいきなり名前で呼び合う仲になっただけでいられるかの対策、もしくは覚悟ぐらいは出来ていたはずなのだ。

この日、殺気（主に男子）というものは大量に集まれば視覚化するのだという事を、俺は初めて知った。

「あはははは、学園中を逃げ回るなんて本当にあるのね」

「誰のせいだと思ってるんだよ」

「自業自得？」

「……」

お前が可愛いのがいけないんだ。なんて口が裂けても言えるわけがない。

「……っ！」

「どうした？」

「なんでもないっ！」

この日をきっかけに、ファンは解散。というわけではなかった。もちろんあの事件に居合わせた女子とその周辺は距離をとるようになったが、その他はかつての近寄りがたいほどの完璧超人ぶりよりも親しみやすいとむしろファンが増えたほどだ。

といっても、未だ素で話せる友人は作れていないようで、俺が窓際でぼんやりしていると、よくしゃべりかけてくる。その度に男子の視線が痛いわけだが、1週間もすれば慣れてしまった。………
：慣れってすごいと思った。

そんな風にして時は過ぎ、夏休み前の期末試験が近付いてきた。

学園中の空気が慌ただしくなる中、俺はいつもと変わらない生活

を過ごしていた。

俺の成績が優秀だから。なんてことはもちろんなく、ただ諦めているだけである。といっても、普段から授業を聞いてないというわけではないので、赤点を回避するだけならどうとでもなるのだ。それに、赤点3つ以上で補習。となったところで、夏休みに予定が入っているわけでもない自分にとってはどうでもいいことである。

———少なくとも自分にとっては、だが。

「そんな低い志じゃだめね。私が補習とは無縁の身体にしてあげる
！！」

ようするに、暇だったのだろう。俺と違って、学年トップである瑠璃（小テストやら、授業態度を見ていればいやでもわかった）には試験勉強に費やすべき時間などほとんどない。おそらく、今から試験でも困らないはずだ。

それよりも何が問題かといえば、勉強をするというのにどこかわくわくしている自分がいることだった。

放課後になった。いつもは教室でだべっている奴も、大抵はカバンを膨らませて家に帰っていく。いつもだったら俺もそれに倣っていたのだろうが、HRが終了した直後に

「帰っちゃ駄目だから」

そんなことを言われ、掃除の間に言われた通りノートを見直していた。

掃除が終わり、教室に入り、

「テストをします」

席に着いた。

「じゃあ10分ね」

「待て、いつからいた」

「細かいこと気にしないの」

渡されたルーズリーフには、手書きで問題が。

掃除の間に作ったのだろうか。相変わらず凄いスペックというか、ありがたいと言わべきか。とにかく気合を入れてやらなくてはならない。

———30分後。

「はい、そこまで。63点」

俺が解いてるのを横で見ていたらしい。テストの余韻も何もない採点スピードだ。というかなんか恥ずかしい。

「基本はだいたい大丈夫みたいね。あと、変なところ出来るのね」

「あー、そこはさっきノート見返した時になんとなく」

「じゃあ、とりあえず問題の解説から始めるわよ」

瑠璃の解説は、分かりやすかった。授業中に理解できなくて、教科書を睨んでも、だから何でこうなるんだよおー！ な問題が、何で出来なかったんだろう、もしかして俺ってアホの子？ なくらい分かり易かった。

こうも分かりやすいと、勉強にも自然と熱が入るらしい。きっと瑠璃がいれば金八先生なんていらなにに違いない。

そんな感じで1週間が過ぎ、試験当日。俺にはかつてない自信があった。このテスト範囲に限って言えば、トップクラスの連中とだって渡り合えるだろう。ふははははは。

なんて1人でニヤニヤしていたら瑠璃に心配された。――反省。

試験は滞りなく終了した。試験は普段と比べると面白いように解けるわけで。というか瑠璃が作るテスト対策問題の方が数段難しかったのだよ。

「よし、おまえら良く頑張ったなあ。分かっていると思うが赤点3つ以上は夏休み中に補習がある。瑠璃あたりは心配ないが、いつもギリギリの奴等は試験休みの途中から夏休みにかけて旅行、補習欠席なんて事になれば2学期。わかってるよなあ？ だからまあ、試験休み中は宿題でもやっとけ。以上解散」

そんな事を言われたところで、宿題なんぞギリギリまでやらないわけで、久々に家でゆっくりと「祐一。帰るわよ」できないらしい。俺はカバンをつかみ、男子の群れから逃げ出した。

その日はテストの復習をし、試験休み中に宿題を終わらせよう週間の予定表がたてられた。どうやら宿題の心配は早々に無くなってくれるらしい。

翌日、宿題は俺の家でやるという事で取り敢えず問題を解いていた。

ピンポーン。どうやら到着したようだ。

「いらっしゃい、瑠、璃？」

そこで思考が固まった。理由はいたってシンプルだ。私服姿の瑠璃に見惚れていた、ただそれだけだ。

「祐一？」

「悪い、何でもない。ちよつと見惚れてた」

「っ！ 何言ってるのよ、バカ」

白いワンピースに日よけの麦わら帽子。首からかけているのはビーズで出来たネックレス。――あれ、そのネックレス。どこかで…。

「ほら、早く始めるわよ」

「あ、ああ」

宿題対策が始まった。

「ふう、そういえばお昼はどうする？ 俺が作るよりはたぶん食べに行った方がいいと思うけど」

「あ、そっか。言ってなかったっけ。お弁当、作ってきてるから」

「え？ 料理出来たの？」

「む、何その反応は？ だったら食べなくてもいいんだけどね？」

「あー、ごめんごめん」

「まあいいや。ちょっとレンジ借りるわよ」

「温めるの？」

「そう、肉じゃが。ママの秘伝の味よ」

「うわ、美味しい」

「あたりまえじゃない。……ママはパパをこの肉じゃがで落としたんだから」

「え？」

「何でもないわ。おかわり、いるわよね？」

「お、終わった」

そんなこんなで、1週間が経った。今は試験休み最終日だ。そう、宿題が本当に終わったのだ。それも、答えを写したわけでも、徹夜をしたわけでもない。この偉業が達成できた要素として欠かせなか

ったものと言え、俺の封印された能力であるわけがなく、1から10まで瑠璃のおかげであろう。ありがたやー、ありがたやー。

「何拝んでるのよ。それより、夏休み。予定入ってる？」

「いや、何もないけど」

「そっか。じゃあそれ全部もらっていい？」

「？」

「だから、夏休み。全部使っていっぱい遊びましようってこと」

「ああ、喜んで」

その後、俺たちはカラオケやゲーセン、解放された学校のプール、海、夏祭り、博物館、美術館、コンサート、とまあ夏休みをこれでもかー、とエンジョイしていた。

しかし、それは突然起こった。

「ごめん、明日の花火大会。行けなくなっちゃった」

「え？ どうしたの？」

「パパがいきなりお見合いしろって。いつもはママが止めてくれるんだけど、よほど条件がいいのかそれもなく。だから、ごめんな

さい。場合によってはまた引越すかもしれない」

「なんでだよ。せっかくクラスにも馴染んできたんじゃないか。その、断れないのか？」

「無理だよ。パパもママもすごく乗り気みたいだし、それに断る理由がないから」

「理由がないって、じゃあこの街に未練もなにもないって言うのかよ」

「そんなことっ！ そんなことないよ。またこの街に来れることをずっと楽しみにしてた！ でも、でも祐は忘れて思い出してもくれないじゃない！」

「瑠璃？」

「祐のバカ！！」

走り去る瑠璃の背中にかける言葉がなかった。

ぼんやりと家に帰ってきた。留守電が入っていたような気もしたがそのまま倒れるようにして眠りに就いた。

子供が2人、人混みの中を駆けている。あれは夏祭り、いや花火大会の子供向けの露天だっただろうか。女の子が夏祭りの輪投げでビニールでできた剣を取ってくれたから、そのお返しがしたいって思っただけ。それで、なんだかキラキラしたネックレスを――。

1日中寝ていたのだろうか、起きた時にはすでに夕方だった。

「――瑠璃、ちゃん」

そう、ずっと忘れていたことがあった。本当なら昨日の時点でアウトなのかもしれない。でも、もしチャンスがあるのなら、俺はそれに賭けよう。このままではきっと後悔をするから。

今日の天気は雲ひとつない快晴。きっと花火は綺麗に咲くだろう。

どーん。空が明るくなる。花火も終盤に差し掛かってきた。

きーこー、き。俺は人気のない公園のブランコから立ち上がる。入口に人影が、瑠璃が立っていたから。

「遅いじゃないか。花火、もうすぐ終わっちゃうぞ？」

「なんで？」

「さあ、来るとしたらここかなって思ってた」

「来ないかもしれないの？」

「ずいぶんと待たせたから。見限られても仕方ないとは思ってた」

「お見合い、あるんだよ？」

「これも、ある意味ではお見合いかなって？」

「子供の頃その他愛のない約束じゃない」

「でも、瑠璃は、瑠璃ちゃんはずっと憶えていてくれた」

「でも、祐は忘れてた」

「ごめん。だから、今度はこっちから言うよ。俺と付き合ってください」

「だめ、約束したでしょ。ずっと恋人だって」

どーん。最後の花火が作りだした影は、1つに重なった。

「花火、終わっちゃったね」

「ああ、でも小さいのも風情があると思わないか？」

ベンチに置いておいた家族用の花火パックを掲げる。

「ふふ、そうね」

2人寄り添って花火を始めた。

ぼとん。最後の線香花火が落ちる。

「じゃあ、行こうか」

向かうは洋館。――大丈夫、新しく咲いた花火はたしかにこの胸に焼きついているから。

がちやつ。玄関の扉を開ける。

「おお、瑠璃。いったい何処へ行っているというんだ。……ところで、君は？」

「俺、いえ私は佐藤祐一です。今日は「おお、君が祐一君かい。待っていたよ!」――はい?」

瑠璃もどうやら分らないらしく、首をかしげている。

「瑠璃が迎えにいったのかい？　そうか、もう2人は再会したんだねえ」

なにやら1人で納得しているパパさん。

「えっと、パパ？　ということ？」

「外国で佐藤夫妻と偶然再会してねえ。話を聞けば祐一君はまだこの街に住んでいるらしいじゃないか。未だ彼女の1人もいないって言うし、じゃあ瑠璃とくつつけてしまおうかって話になってね。善は急げと1人帰ってきたんだよ」

ぴりぴりぴり。両親から携帯に電話が掛ってきた。

「はい」

『どう、びっくりした？』

「……何が？」

『瑠璃ちゃんよー！　ちゃんと家にたどり着けた？　いなかったから留守電に入れておいたんだけど』

「あー、うん大丈夫だよ」

『そう？　お幸せにねー』

がちや、ぷー、ぷー。……はあ。

「今日はパーティーだー！」

丸い月が浮かぶ空に、パパさんの声が響いた。

目を閉じれば、胸に花火の音が木霊する。

『いい？ 祐と私はずっと恋人同士なんだから、いつまでたっても忘れちゃ……だめなんだからね！！ だから約束、もう一度逢えたら結婚しよう！！』

目を開ければ、そこにはどんな花火にも負けない笑顔が咲いている。

俺はこの花を隠す雲を、二度と近づけないようにしよう。

ネコは花火を咥えて走り出す。雲ひとつない空の向こうへと。

——何処までも。

（おわり）

(後書き)

友達と話して、『金髪ツインテールお嬢』という枠組みだけ決めて書いたもの。

かなーり大雑把に書いたので、内容がスカスカだったり。

行き当たりばったりで書きまくったものですが、感想などよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9836p/>

猫を被ったネコ

2011年1月8日13時56分発行